北総の里

発行日 2013. 2. 3
第 221 号
（第1回発行 1974年4月1日）
発行所　北総育成園
千葉県香取郡東庄町
笹川い5852
☎ 0478-86-3003
FAX 0478-86-3295

北総育成園のホームページが新しくなりました！

施設の概要や理念，利用者の様子，園長からのお知らせ等，盛りだくさん！ ぜひアクセスしてみて下さい。

ホームページアドレス
http://www.hokuso-ikuseien.org/

Eメールアドレス
hokusoikuseien@e-sazankakai.or.jp

特集

共感・共生・惻隠の情

▲「トムノメンドーミチョル」と安部さん。そして安部さんを見つめるトムの信愛の眼差し。（3年前撮影）

▲みんなに可愛がられたナラだった。（12月、ナラが亡くなる直前）

オス山羊のトムは20年以上の長寿。園芸班の片隅にわりかし広い居住区をもらい生きてきた。性格は大人しく甘えん坊だが、水牛のような立派な角を持ち、〝いかめしい〟雰囲気で利用者職員はあまり可愛がらない。頭を撫でられ、面白がって草を与えている様子を余りみたことがない。その小屋は町道に沿っていて、通り掛かりの地域の爺さんが孫連れて「ほらヤギだどー」と珍しがって寄ってくれた。信州の水飲百姓の倅である筆者は小さい時分山羊の世話をさせられていたので、山羊には犬以上の親しみを感ずる。園芸班のお茶請け煎餅をくすねて、時々ヤギに与えているのでよく馴れていて、私の足音を聞き分け遠くからでもメーメー鳴きだすようだ。

利用者の安部さんは今年63才。あの松本清張〝砂の器〟のご当地、島根県出雲の水飲百姓の娘。はるばる千葉に流れて北総の人になった。小さい頃父母の畑仕事の隣にいたか、下手だが草刈り大好き。北総では何時しかトムの世話掛かりおばさんとして長い年月を生きた（いろいろ逸話がある。）雨の日も風の日も一輪車押してトムの餌である土手の草刈りに出掛けてくれた。

そのトムが死んだ。10月のこと。安部さんはそっとトムの頭を撫で手を合わせていた。

今回この号は特集〝共感・共生・惻隠の情〟。頁を読み進むと登場する犬の〝ナラ〟。そのナラも15年生きてこの12月にトムの後を追うように死んだ。生きものはいつか死ぬ。私たちもいつか死ぬ。どんなに大切にされていても。施設のくらしも生き物の暮らし。その存在を意識するお互いの目と目が折り合いを感じ取る日常の積み重ね。

「共感・共生・惻隠の情」＝「相手を思いやる心」だ。〇〇禁止法、〇〇防止法。成程、その通り。が法律に心は無い。生きものには心がある。化学繊維のパンツと生き物繊維のパンツ。「さあ、どっちを選ぶべー。おら、その人にあわせてあったけー、思いやりの生きものパンツの方がすきだ…。」

〝うしろ姿のしぐれてゆくか〟山頭火は惻隠の情の世間に支えられて彷徨った…。

（武井）

24年を終えて、25年に立ち向かう

2013・1・10 初職会

支援課長　白樫　久子

バリアフリー新館の工事を横目にしながらこの人たちの生活と命を守ることの大変さを、改めて感じた今期でした。

①新法に移行して

２学期の初めに、今年度夜勤体制に移行したことで、各自の情報収集や引き継ぎの正確さが業務の正しい遂行に繋がるという認識、改めて余裕のある出勤時間とお互いの難儀を思いやっての協力が重要と書いた。私自身は支援課長とサービス管理責任者の立場であり、特に朝礼での情報・重要な情報は、必要な職員に適切に伝わるように配慮してきたがまだまだ十分でない事もあった。全体で話すより、必要な事は個々に伝えることも大切である。一度朝礼で話したから自分の責任は終わり、ではない。その情報がきちんと伝わって利用者のためになっているか、継続できているかが重要なのである。一度決めたことが、統一されるには時間と配慮が必要ということを全職員で意識していく。

②バリアフリー棟建設

工事も随分進み、擁壁の取り壊しをしている。城之内補佐が常にその情報を流してくれ職員も安全管理に努力してくれ今のところ怪我や事故はない。今年３月には竣工、来年度途中で引っ越し、新生活が開始となる。改めて、建物や形が変わっても北総が積み重ねてきた歴史と理念を引き継ぎ、より良い支援・仕事が出来るように我々は更に力を付けていきましょう。来年度の既存棟改修工事や引っ越しの準備等が具体化してくるので、しっかり検討していく。

③「人を育てる」

新職員の育成が大きな課題であるが８カ月を過ぎ、皆笑顔の有る良い仕事を身につけてくれた。２年目職員も先輩職員である。仕事を教える時は、基本を丁寧に教えること。きちんと説明する事は分量も多くなり労力が必要だが、それが我々の給料。利用者の面倒を見ることだけが仕事でない。自分はまだ人に教えられる立場でないと引いてはいけない。自分の仕事を高めるためにも、組織力を高めるためにも「人を育てる」意識を高めてほしい。

今期は園長にもご相談して、多くの職員を外部の研修に参加させて頂いた。外に出て、改めて自分の仕事を振り返る良い機会となる。お互いの研修報告を読んで話し合いをして、せっかくの機会を大切にしていきましょう。

④記録をとること

自分の仕事を高めるために勉強することは不可欠である。４月から職員会議で「働くあなたへ」の読み合わせ・ＤＶＤやプリント等での勉強会を企画してきたが、２学期はなかなかその時間をとれずに行えず、これは私がおろそかにしてしまったことである。

仕事のメモをつける習慣も重要です。

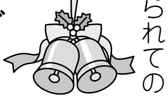
観察記録なども全体的にはよく書かれているが、量的にも内容的にも個人差はある。今後、個別総括という大仕事がある。自分ひとりの情報だけでなく、話し合いをして他の職員から情報を集めて、この人達のかけがえのない一年をまとめていこう。また、資料や仕事の期限を守ることは、仕事の基本。私は外部との仕事も多く、北総の信頼を損なわないように早めに計画をたて、段取りをする事を心掛けてきたが、足りない事もあった。今後も細心の注意を払って仕事に臨む。相手の立場を考えての報告・連絡・相談、その内容の向上に努力していきたい。

改めて、組織の中で仕事をしているという意識を大切にすること。北総40年目を目前にして、自分のできることに努力を怠らないように、一歩ずつ丁寧な仕事を心掛けたい。皆さんに対していろいろうるさい事も言いました。うるさい事を言いながら、自分の仕事や課題と向き合い努力した毎日でもありました。さあ、皆で25年に立ち向かいましょう。

▲25年１月、未だブルーシートのベールの中に隠されたバリアフリー新棟

共感 地域の皆様に支えられて

今年度も東庄ライオンズクラブ招待クリスマス会や千葉郷土料理研究会の龍崎先生による太巻き寿司教室が開かれました。北総が地域に支えられての大切な交流会となっています。今回感想を寄せて頂きましたのでご紹介したいと思います。



①東庄ライオンズクラブ招待クリスマス会

クリスマスに招待して思うこと

東庄ライオンズクラブ会長
宇井　秀雄 様

我々クラブで毎年、12月10日前後に、北総育成園の利用者の皆さんを招待して、少し早目のクリスマス会を楽しんでいる。

この事業は30年余り続いているが、こうして長く続いているのも、北総育成園の利用者の皆さんの楽しむ様子に惹かれて、今に続いている一大事業であります。

北総育成園の皆さんのことを考えるとき、年間5～6回頂いている「北総の里」機関誌に非常に大きな印象があります。

２２０号では、入口の壁画を、この壁画は「ちちははとこの人たちの交歓、職員とこの人たちの交歓、そしてまたこの坂を往来する人たちのありのままを見続けていた」。

第三者の私としては、この「ありのままを見続けていた」というフレーズに、非常に崇高なものを感じました。実に切ない、切ないけれどもこの切ない利用者の方のために一生懸命に、立ち働いておられる姿、そのままの執心と謙虚を感じました。

▲ライオンズ招待クリスマス会にて。宇井会長を囲んで楽しいカラオケタイム♪　H24.12.12

２２０号の「村議会だより」に、花沢議員の干支人形が「はーとふるメッセ」で奨励賞入賞のニュースがありました。そのあと、園での保護者との勉強会のとき、花沢利夫議員のお父さんは「これ、利夫が作ったやつだよ！」と嬉しそうに買って帰られたとの、実に心優しい気配りの記事もありました。

２１９号では、障害者自立支援法への移行後の対応に、管理職としての心構えの記載がありました。「この人達は自分の苦労を語り伝えることが出来ない」。その困難に対してよりよく支援する心構えの記事がありました。この社会的責任の達成のために、昼夜の正確な引き継ぎ、時間に余裕をもった勤務、安全配慮、風通しのいい施設運営そして後輩の指導等実に貴重な記事がありました。

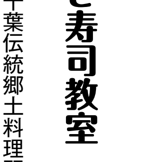
２１８号では、村長選挙で「福田克三さんが僅差で当選」に感泣したこと。この記事をみて私は、福田さんが単に当選したという喜びだけではなく、この〝温もりの里〟北総の里の村長になることができたことが、うれしかったという感激だったと思えてなりません。

私は、この機関誌から受ける武井先生をはじめ職員の皆さんの非常に温かい印象と、これに対して、利用者のために一生懸命に勤務される現実の印象が全く同じに感じます。

沢山の職員の方々が心温まる、そして誠実に原稿を寄せておられる中で、限られた紙面に私の拙稿での紹介なるが故に、不本意ながら敢えて、記事の作者名を省かせていただきました。

②太巻き寿司教室

千葉伝統郷土料理研究会
龍崎　英子 様



平成24年12月11日は9回めの北総育成園訪問講習会の日でした。つまり園生と当会の会員が、太巻き祭りずしを介して交流する日で、園生たちの巻いた太巻きずしはその日の夕食に供されるのです。体験する園生は10数名と限られているので、足りない分は施設の調理員と私たちが巻きます。

今年は園生はバラ、私たちはアゲハ蝶の卵巻きでした。実は例年サザンカの花が定番だったのですが、職員の腕も確かなものとなったので難しいアゲハ蝶を選びました。

顧みると10年前、幕張メッセで開催された知的障害者施設の全国大会において、私は食部門の助言者を仰せつかり、初めてこのような施設の給食と向き合ったのです。

発表者の方々の、愛情溢れる発言に感動しました。このような世界もあったのだ。

この感動を武井園長に伝えたところから毎年園生たちに「教え楽しむこと」が恒例となりました。初めて教えるときは経験がないので緊張しましたが園生の無邪気さに可愛さを感じ、最後は感動の一語につきました。最近は元教員という会員が参加しているため、教え方の上手なことは、さすがです。年末になると私たちを心待ちにしている園生の皆さんたち、今年は少しむずかしいものを巻いてみましょうか。

▲龍崎先生を囲み千葉郷土料理研究会の皆さんと記念撮影。皆の笑顔とお寿司の花がきれいに咲いた。H24.12.11

共生
長崎の姉来たる　普賢学園姉妹交流

11月29～30日と普賢学園の皆様が来園されました。実際にお互いの施設を訪問する機会は年一回しかありませんが、ご案内した見学地やプレールームで行った歓迎会の中で皆様の心からの笑顔に触れ、長年に渡り大切に育んできた姉妹の深い絆を改めて感じました。今回訪問して下さった普賢学園職員の林田さん、近藤さん、そして利用者を代表して真中さんから感想を寄せて頂きましたので、ご紹介します。

北総育成園を訪れて

普賢学園支援員　林田小夜子

11月29日～30日、普賢学園の利用者5名と職員3名で北総育成園を訪問させていただきました。

早朝より、胸を弾ませ普賢学園を出発し、羽田空港へ到着すると、杉本さん、絵鳩さんが迎えてくださいました。北総育成園到着までの間に成田山新勝寺や航空科学博物館など、私自身初めて訪れる地であり車中から見える景観や杉本さん、絵鳩さんの飽きさせないトークのおかげであっという間に施設へ到着しました。

到着すると、玄関前では、利用者、職員の方が総出で迎えてくださり、以前より広報紙や写真等で施設の様子を拝見することはありましたが、とても盛大な歓迎に大変嬉しく思いました。

中では歓迎会を開いて頂き、芸座での太鼓や笛の演奏、踊り等を見せて頂きました。演奏終了後、武井園長先生からの第一声は「今日のは全然ダメだった」というお言葉でした。しかし、私自身は内容の出来ということより、職員の方も一つになって楽しんでいるという印象を強く感じ、利用者一人ひとりもやらされているのではなく自分の役割、自分しかできない誇りのようなものを持って取り組んでいる様子がとても伝わってきました。

夜は鯉屋旅館にて懇親会を設けて頂きました。昼間には聞くことの出来なかった同じ職員としての悩みや課題、そして自分たちの思いをお酒を酌み交わしながら語り合うことが出来、姉妹の絆の深さを感じた時間でもありました。また、何より武井園長先生の利用者に対する熱い思いを職員の方が引き継いで支援にあたられているのがとても印象的でした。

▲今年も長崎の姉が千葉に会いに来てくれた。H24.11.29

園内にはたくさんの写真やポスター、さりげなく飾られた一輪の花、「利用者は見せものではない」という武井園長先生の言葉のもとに利用者と共に楽しみながら支援に当たられている職員の方々にとても感銘を受けました。

短い交流の時間の中で多くのことを実践しておられる様子を見せて頂き、自分自身を振り返ることが出来ました。

帰る際も、武井園長先生をはじめ、城之内先生、保科さんには寒い中バスに乗るまでお見送りをしていただき、あわせて利用者、職員の方々にも心から感謝致します。

今後も姉妹の絆がより深めていけたらと思います。

北総育成園を訪問して

普賢学園支援員　近藤　哲生

拝啓、寒冷の候、北総育成園の皆様におかれましては、ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

さて、先日の北総育成園訪問の際は、武井園長先生を初め、職員、利用者の皆様にはお忙しい中、盛大な歓迎をしていただき、誠にありがとうございました。

早朝より羽田空港までお迎えに来ていただき、成田山新勝寺や航空科学博物館など案内していただきました。

村議会だより ⑩⑦

２０１３年を迎えました。今年は巳年。年明け1月6日には毎年恒例の北総の里合同新年会が行われました。北総育成園ならびに笹川なずな工房の利用者・保護者・職員、そして経営協力委員である林様もお招きしての総勢２００名を越える新年会。冒頭では園長はじめ保護者会など関係各位による挨拶が行われました。第40期村長の福田氏もこの新年会の挨拶が新年一発目の仕事。毎年、年末年始にかけては様々な行事も重なるので、その度に村長は挨拶をしなければなりません。もちろん各セレモニーにあたっては事前に余暇部会職員との打ち合わせと練習が行われます。「村長、○○ですよ、お願いします。」「ワカンネーヨー。」と顔をクシャクシャにする福田村長。本番ぎりぎりまでは「アー、ヤダヨー。」と愚痴をこぼしますが、さすがは北総第一期生の福田氏。人前に立てば、背筋が伸び、深々と頭をさげ、「モッコウハン、ガンバロー。」と挨拶。事前に練習はするのですが、ほとんどはこの挨拶、しかしそこが福田村長の人徳。人を和ませ、形となってしまうのです。五月の解散式までラスト四ヶ月。福田村長、今年もよろしくお願いします。（猪田）

間近で飛行機の離着陸を見ることができ、利用者も大変喜んでおりました。

北総育成園へ到着してからは、利用者、職員の皆様より心温まる歓迎会を開いていただきました。

芸座演奏での太鼓や踊りは、私たちの訪問のために改めて練習して下さったとの事で、大変感動致しました。

普賢学園同様、北総育成園でも利用者の方の重度高齢化が進み、芸座演奏を上手くできる人が少なくなり、新しい職員さんも利用者の方々に教えていただきながら続けられているとのお話でした。

改めて伝統を受け継いでいく事の難しさを感じました。

各作業班の案内紹介では、今年は原木椎茸が豊作にも関わらず、風評被害がひどいとの事で、震災の爪跡は本当に根深いと感じました。

しかし、お土産にいただきました、手作りの花束、手提げ袋、ひょうたん、カップ、干支の置物などは、皆様の温もりを感じることができ、利用者、職員一同、大変喜んでおります。

▲紙工芸の干支作りを熱心に見学して下さった。H24.11.30

北総育成園園舎は、新築工事の真っ只中でしたが、武井園長先生のお話では60名の個室を設けられる予定との事でした。

個室と言うと響きは良いですが、一人ではなく他者と一緒が良いという利用者の方にとっては不向きであるとの事でした。

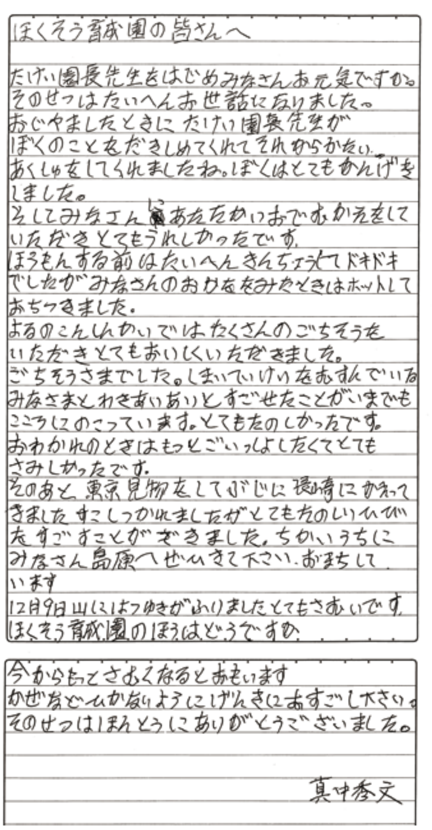
時代の流れの中で、目まぐるしく変わっていく法律に基づき、如何に利用者に最適な環境を整えるか、本当に難しい事だと思います。

夜の懇親会では、利用者・職員・施設の枠を越え、皆でお酒を酌み交わし、本当に楽しく交流を深めることができました。

この姉妹施設の交流を、今後も末長く続けていける様、切に願っております。

寒さ厳しい折から、皆様お風邪など召されぬ様、ご自愛ください。

また来年お会いできる日を楽しみにしております。



ほくそう育成園の皆さんへ

たけい園長先生をはじめみなさんお元気ですか。そのせつはたいへんお世話になりました。おじゃましたときにたけい園長先生がぼくのことをだきしめてくれて、それからかたいあくしゅをしてくれましたね。ぼくはとてもかんげきしました。そしてみなさんにあたたかいおでむかえをしていただき、とてもうれしかったです。ほうもんする前はたいへんきんちょうしてドキドキでしたがみなさんのおかおをみたときはホッとしておちつきました。

よるのこんしんかいではたくさんのごちそうをいただきとてもおいしくいただきました。ごちそうさまでした。しまいていけいをむすんでいるみなさまとわきあいあいとすごせたことがいまでもこころにのこっています。とてもたのしかったです。おわかれのときはもっとごいっしょしたくてとてもさみしかったです。そのあと、東京見物をしてぶじに長崎にかえってきました。すこしつかれましたが、とてもたのしいひびをすごすことができました。ちかいうちにみなさん島原へぜひきて下さい。おまちしています。

12月9日、山にはつゆきがふりました。とてもさむいです。ほくそう育成園の方はどうですか。今からもっとさむくなるとおもいます。かぜなどひかないようにげんきにおすごし下さい。そのせつはほんとうにありがとうございました。　真中　秀文

太田川のほとり ⑪⑦

去る12月26日、北総に来てから15年の月日を過ごしてきた犬のナラが永眠した。自分は、その日は休日で、ナラの死を知ったのは翌日の事だった。

ナラの世話や散歩などよく面倒を見ていた柳松さんが、ふと自分の隣に来て「ナラはしんじゃったけどみんなによくめんどうみてもらっていたからしあわせだったよね。」と話しかけてきた。「そうだね。」と答えた後に、自分は正直、毎日は面倒を見ていたとは言えず、具合が悪くなってからは気には留めていたが声を掛ける程度。毎日ナラの近くに行き世話をしていた柳松さんの足元にも及ばない。毎日ナラの世話をしていた柳松さんだから言える言葉だと思う。

生き物を大切にする。当たり前の事が中々出来ないのが悔しかった。又一つ利用者から当たり前の事を当たり前にやる大切さを教わった。（杉本）

▲「ナラしんじゃあダメだ…」と泣き顔。ナラのことをいつも気にかけてくれた柳松さん。ナラもそんな柳松さんが好きだった。

街道をゆく ⑲

ナラのこと

絵鳩　典子

ナラが北総の仲間に加わったのは今から15年前の１９９８年春のこと。武井園長が奈良県を旅した際、偶然立ち寄ったレストランで仔犬がたくさん生まれた事を御主人より聞き「一匹もらってくれないか」という事に。そう「ナラ」のナラは「奈良県」のナラ。これも何かのご縁という事で譲り受けるが、なんと園長は仔犬のナラをバックに入れて近鉄特急、新幹線、高速バスを乗り継いで千葉まで連れてきたのだ。この事は「北総の里」第１４５号（１９９８年３月発行）の「街道をゆく」の中で写真入りで紹介されている。道中一声も発する事無くお利口さんにしていたと言う。

真っ白でかわいい仔犬だったナラもスクスクと成長し、成犬になると力も強く散歩も一苦労。嬉しいと大きな体にも関わらず全身で体当たりしてくるので「キャー！」と思わず叫ぶ女子職員もいた。ナラの先輩はチビだったがチビが亡くなると、ナラは北総の犬たちの一番先輩に。トラやハナコ、ナナコ、コタロウと仲間が増えていく中、いつしか歳を取っていった。

去年の夏、ナラの睾丸が腫れているのを園長が発見しすぐ病院へ。病名は癌…。もう末期で手の施しようがないとの事。せめてもの救いだったのはナラ自身には痛みがないという事。でも患部を舐めるナラは痛々しく、夏の厳しい暑さも影響し、段々と元気が無くなった。園長がそんなナラの様子を職員、利用者全員に伝える。そして職員に「動物はたった一人で死んでいかなくてはならない運命。悲しみ、辛さを誰かと分け合うことなく、一人で受け止めていくその潔さを、我々職員は目を逸らさずしっかり焼き付けていくこと。そしてそれを利用者に伝えていくこと。死を通して命の尊さを学ぶ最高の教育的視点をナラから与えて頂いているという意識を忘れるな」とメッセージ。その日からナラの様子は作業部会の興梠主任から職員朝礼で報告。確実に迫る死に今、我々職員はどう向き合っているか、利用者に正確に伝えられているか確認してきた。

利用者は実に正確にナラと向き合ってくれた。荒木さんは病気と加齢でバサバサになったナラの毛を、自分のいらなくなったヘアブラシで梳かしてくれた。元々動物好きの堀越さんも「ナラ元気か？」と朝に夕に声を掛けてくれた。動物課課長の行男さんはこまめに水を換えたり、「ご飯、食べてるね！」とホッとした顔で報告してくれた。その他大勢の仲間がナラに心を寄せてくれた。

酷暑が過ぎ、過ごしやすい秋になると、ナラも幾分楽なようで小康状態が続く。ご飯もよく食べてくれるようになった。しかし朝夕の冷え込みが厳しくなった頃より、また衰弱が進行してしまう。目も耳ももう駄目なようだった。後ろ足に力が入らず小屋に戻れない事もあった。日に日に弱って行くナラを見るのは忍びなかったが、だからこそ声をかけ、頭を撫でナラのギリギリの命と向き合った。師走に入りクリスマスイルミネーションを玄関前に飾る時期になった。園長の発案で今年はナラの小屋周辺にもライトを連ねた。点灯式では改めてナラの死が近い事を皆にメッセージ。色とりどりのライトに照らされたナラにますます皆の心が集まった。

お別れの日はクリスマスの夜だった。夜中12時「オウ、オウ」という鳴き声に居合わせた職員が気づき、ナラの元へ。もう鳴く力なんて残っていないと思っていたナラが最後の力を振り絞って鳴いていた。２時、鳴き声が止みナラが小さく震えていた。４時、目を閉じ静かに息を引き取ったナラを夜勤明けの職員が看取ってくれた。朝７時半、勤務職員と外に出られる利用者でナラの元に集まり手を合わせた。夕方、出張から戻った園長が「ナラ、ご苦労さん」とお別れの言葉。改めて職員、利用者を集めてナラの死を悼み手を合わせる。そしてナラは桜の木の下へ埋葬された。

ナラ、天国で先に旅立ったトラやコタロウと会えましたか？泰乃さんがきっと張り切ってお散歩に連れて行ってくれるよ。ナラ、自分の死をもって私達にたくさんの大切な事を教えてくれました。本当にありがとうございました。これからは空の上から、どうぞ私たちの事を見守って下さいね。

▲ナラの小屋を中心にイルミネーションを飾りつけ。ナラは小屋でお休み中。H24.12.17

連載

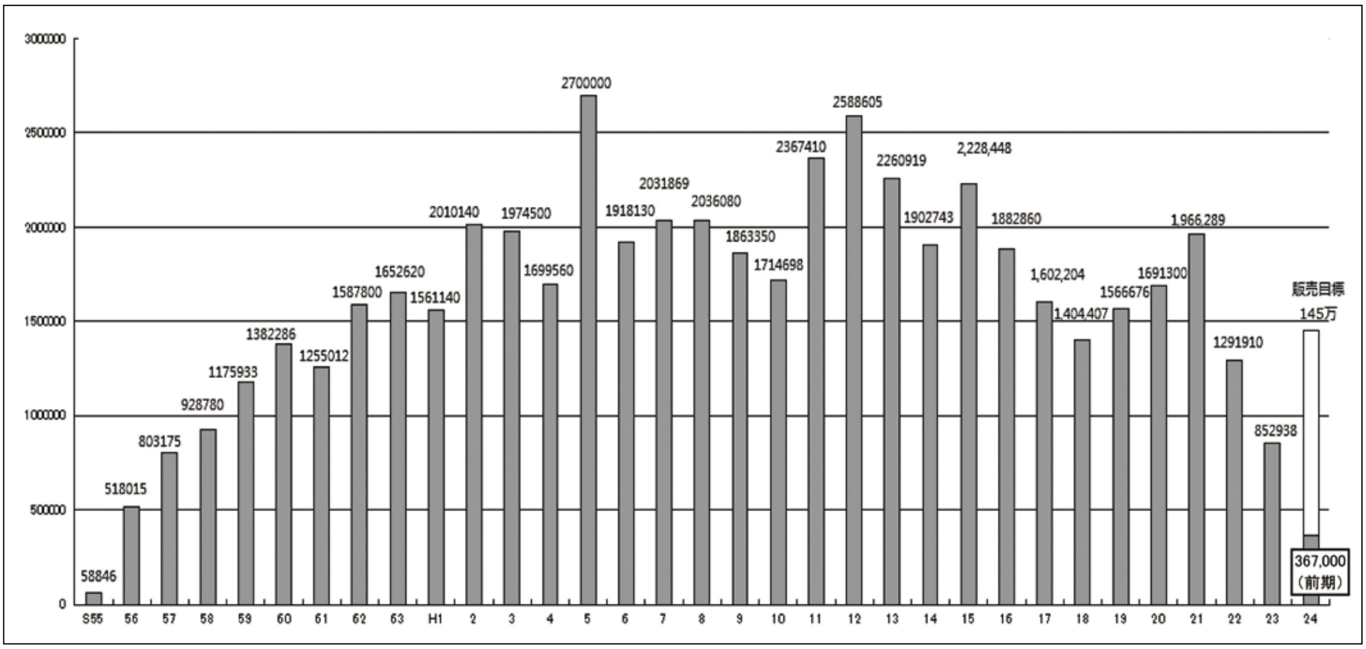
北総40年特集
「働くこと生きること」の軌跡を辿る

40 年の歳月が流れた北総。「働くこと生きること」が北総の精神。この連載では、一作業班ずつ40年を振り返ってみたいと思う。第２回目は園芸班。

２、園芸班
S55～H24年

H24内訳		
利用者	11	名
職　員	3	名
パート	1	名
利用者平均年齢	50.9	歳

初年度からの売り上げグラフ



園芸班は昭和 54 年農芸班から北総の作業に組み込まれ、55 年園芸班初年度の売り上げは 6 万円弱である。昭和 54 年最初の年は園芸としての実質的な活動はなく、農耕としての色合いが強かった。その年の年度末に現在あるガラスのフレームが設立され、昭和 55 年より園芸班として本格的に活動スタートしている。翌年 56 年には売上 50 万と飛躍的にアップし、昭和 59 年には売上 100 万円を突破した。平成の時代に入るとフレームを増設して、平成 2 年にはついに売上 200 万円を突破している。平成 3 年には今現在のフレーム面積とした。しかし、フレームの規模と売り上げは比例するものだが平成 4 年 6 年 9 年 10 年とフレームを増設する前と売り上げは大差ない。これは北総の園芸班の場合、年間売り上げの 7 ～8 割がシクラメンに頼る事となり、その年のシクラメンの出来で年間売り上げが左右される為である。したがって 1 年の売り上げをシクラメンが握っているといっても過言ではなく、夏以降のシクラメン管理では細心の注意をしながら毎年取り組んでいる。平成 12 年以降は年々シクラメンだけの売り上げは市場値が下がる中で下降している。北総園芸としてもシクラメンの単価が下がる中で、シクラメンに代わる花の生産に取り組みニューギアインパチェンス等パテント物に着手した。売り上げ的には一時的に伸びるが、純利益でいうと経費が掛かりすぎるパテント物は失敗した時に赤字となってしまうので、平成 16 年から生産を中止している。平成 21 年以降は花の値段が市場でも値が付かず、販売に出しても昔のような売れ方はしない。市場値でいうと花によっては半値以下の単価であるので、自分たちで販路開拓していかなければ年々売り上げは落ちる一方である。手売りでいくつさばけるかが勝負となるのでシクラメンだけでなく、他の草花も常に道の駅や販売に出していけるように利用者と多種の生産を心がけていきたい。

（園芸班チーフ青野）

園長コメント

昭和四十九（１９７４）年開園した当園。五十名定員であったが、最初の一ケ月は四名。二ケ月目で二十名。少しずつ人数が増えていった。男は畑班（農耕班）で女は繕い物（手芸班）。当初はそれで対応できたが人数が増え、いろんな個性の人がいる。そこで園芸班、木工班、陶芸班等が整備されていった。当り前のことだが園芸班の一・二年は小さなフレームの中のままごと仕事。が、次第に拡大路線に乗る。多くの園生は船橋市の人。保護者は船橋市民。その背後に善意の無数の都市消費者が居た。また、香取のこの地はシクラメン栽培が盛んであったこと。その農家が力を貸してくれた。園芸班職員も必死でその栽培技術を学んだ。バブルの頃はシクラメンが高く売れた。二百七十万という数字が懐かしい。景気低迷で昔の勢いは無いが、二十年後の今もそのシクラメン農家が助けてくれる。毎年七月に朝顔、十一月にシクラメンを船橋市長さんにお届けする。この機会を励みに職員は毎年いい作品作りを心がけている。（武井）

みんなの広場

①やさしい人

ある厨房遅番の日のこと。菅谷行男さんが「あめがふってきたよ！」と教えに来てくれました。「えっ、今日は傘持ってこなかった。袋でも被って帰ろうかな。」と答えたのですが、勤務が終わり帰ろうと玄関に向かうと、行男さんが傘を持って私の帰りを待ってくれていました。私は傘を借りたお陰で濡れることなく帰る事ができました。とても感謝の気持ちでいっぱいでした。

（調理員　小林）

②福島から原木届く

この時期林産班では、新しい椎茸のホダ木を作るために福島から原木を購入している。今年も大震災以降、放射能問題が騒がれ、福島から原木を買えるか心配していたが、原木業者も悪戦苦闘し、何とか安全基準値以内の原木を提供してくれる事となった。

今年購入した本数は４０００本。これを３回にわけて福島から運んでもらうが、トラックから降ろすのはこちらの仕事。男子職員と数名の利用者で早朝から下ろす。今年は厳寒な冬で早朝から一本５kgほどある原木を下ろす作業は大変であるが、林産班利用者で手伝いにきてくれる方はいつもは朝起きるのが苦手でも、この日ばかりは自ら起きてやる気になって臨んでくれている。ただ原木を下ろすだけの作業であるが、この人たちにとっては見栄を張れる仕事になっている。全ての原木を下ろし終え、ヘルメットを外すと頭から湯気が立ち上がり、頑張ってやり遂げた誇らしげな利用者の表情がある。原木を購入した事で被災地支援にも繋がる。これから２ヶ月原木をしっかりホダ木にするべく林産班みんなで菌打ちして、おいしい椎茸を沢山作っていきたいと思う。

（菅谷）

▲厳寒早朝７時。皆で約 1500 本の原木を下ろす。H24.12.26

③Yさんのこと

「東」というと「ひがしやまのりゆき」と答える。

「西」というと「にしきのあきら」と答える。

「北」というと「きたじまさぶろう」と答える。

「南」というと「みなみこうせつ」と答える。

Yさんすごい！と感心しながら今度はためしに「右」と言ってみると、「ひだり」とあっさり答えたYさんであった。

（梶浦）

行事予定

2月4日　尼子式老化度測定期間（～ 11 日）
6日　狩野式運動能力検査
20日　作業計画会議
23～24日　作業班旅行①（木工班・手芸介護班）
25～26日　作業班旅行②（陶芸班・農耕班）
27～28日　作業班旅行③（紙工芸班・園芸班・林産班）
3月6日　部会・委員会クラブ総括
17日　帰宅日
20日　春休み児童日中受け入れ開始
24日　帰園日
27日　新年度構想討議

編集後記

毎回たくさんの文章が寄せられてできるこの広報紙「北総の里」。今回初めて作り手となり、編集作業に携わらせて頂きました。編集長とは名ばかりのもので、ベテランの絵鳩さんについて一から教わって参りました。手元に寄せられた文章を読むと、その人その人の表情や思いが浮かび、熱いものとなって伝わってきました。文章に込められた思いやりの心や熱意、夢…こんなにもたくさんの方が思いを寄せて下さっているのだと、原稿ひとつひとつが宝物でした。言葉にしなければ知り得なかった相手の思いがあり、初めて触れる優しさにも出会いました。このことを知った以上、言葉にすることや伝えることがどんなに大切で必要なのか気付きました。

今回のテーマは「共感・共生・惻隠の情」。隣にいる人のさり気なく差し伸べてくれる手、言葉が何よりの生きる力ではないでしょうか。今号を読んで少しでも感じ取っていただけたらと思います。そして私自身、少なくとも近くにいる人の小さな優しい言葉や、さり気なくとも温かいやりとりを感じ、気付ける人になりたいと思います。

（金子）